

大基委大評第 149 号

平成 26 年 3 月 17 日

皇學館大学

学長 清水 潔 殿

公益財団法人 大学基準協会

会長 納 谷 廣 美



貴大学の「改善報告書」の検討結果について (通知)

標記に関し、本年度、貴大学よりご提出頂きました「改善報告書」につきましては、大学評価委員会において慎重な審議を行い、別紙の通り検討結果をとりまとめましたので、ここにご通知申し上げます。

添付資料 「改善報告書検討結果 (皇學館大学)」

以上

＜ 改善報告書検討結果（皇學館大学） ＞

[1] 概評

2009（平成 21）年度の本協会による大学評価に際し、問題点の指摘に関する助言として 14 点の改善報告を求めた。今回提出された改善報告書からは、これらの助言を真摯に受け止め、意欲的に改善に取り組んでいることが確認できる。

ただし、次に述べる取り組みの成果が十分に表れていない事項については、引き続き一層の努力が望まれる。

教育内容・方法については、文学部、教育学部および社会福祉学部において、1 年間に履修登録できる単位数の上限を適切に定めていなかった点に関し、社会福祉学部を改組した現代日本社会学部が完成年度となる 2014（平成 26）年度に向けて全学的に検討を進めていることが確認できるが、現時点では改善されていない。複数の資格取得には単位数の制限が難しいという認識から、各学部の具体的な改善計画は進んではおらず、一層の努力が望まれる。次に、文学研究科および社会福祉学部において、ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動が実質的には行われていなかった点に関し、FD 活動が開始されたことは確認できるが、現時点では組織的、継続的な活動とはいえないので、一層の努力が望まれる。3 点目に、国際交流を推進する大学の方針にもかかわらず、学生の教育研究交流が不活発であった点に関し、国際交流に向けたさまざまな取り組みは行われているが、長期の交換留学については依然として活発とはいえず、今後も継続的に検討することが望まれる。4 点目に、文学研究科において、過去 5 年間の課程博士の授与件数が少なかった点に関し、改善に向けた取り組みは行われているが、博士学位取得者数はいまだ少なく、改善が望まれる。

学生の受け入れについては、文学部国文学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率および収容定員に対する在籍学生数比率が高かった点に関し、2013（平成 25）年度においてもそれぞれの比率が 1.27、1.30 と高く、一層の努力が望まれる。次に、全学部における AO 入試での入学者が募集定員を大きく上回っていた点に関し、依然として募集定員の 2～4 倍程度の入学者を受け入れており、改善の取り組みが認められない。

研究環境については、教員の研修機会が十分に確保できていなかった点に関し、短期の海外研修費の利用が増加しているものの、長期の留学等の利用は依然として不活発であり、改善に向けての一層の努力が望まれる。

図書・電子媒体等については、各キャンパスの図書館の閉館時間が早く、学生の利用環境として十分ではなかった点に関し、さまざまな検討が行われているが、限られた期間を除き、開館時間の延長はなされておらず、改善に向けた一層の努力が望まれる。

[2] 今後の改善経過について再度報告を求める事項
なし

以 上